
習作

FOX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
習作

【コード】
N92010

【作者名】
FOX

【あらすじ】
習作として書きました。

ある男が、なにもない白い道を歩く事から物語は始まります。

あとは読んでいただければと、思います。

・プロローグ

私は机の上に新品のノートを拡げた。

少し風が吹いている、木々の揺れる音だけがする夜だ。

スタンドの明かりをつけ、ペンを手に取って書き始めた。

「目の前には、白い細い道が続いている」

・第一章

目の前には、白い細い道が続いている。

幅は一人がちょうど通れるくらいだ。

そして現在の状況を示すに一番特徴的の特徴は、背にはこれまた真白い壁があるという事だ。

要するに、俺は前に進むしか無いという事だ。

いや、選択肢はいくつかある。

「ここに残る」

「前へ進む」

「背の壁を思い切り叩く」

「これは夢だ」

「大声を出す」

「もっとよく考える為の時間を設ける」

通常なにかにつけよく考え、それ故に行動が遅くなりがちな俺であるが、この何もない状況が前へ進むという結論を早く導き出させた。

いや、それだけではない。「ここに残る」ことを躊躇わせる要因がもう一つあった。

それは今俺が全裸である事。

寒さや体を傷つける危険は特になかったが、ここに俺が全裸で留まり続け、抜けた毛やかき落とした皮膚の破片でこの真白い空間を汚してしまう事が我慢ならなかった。

そんな小さな要因ではなく、とにかく潔癖性な俺の事だ、その場に糞尿を垂れ流さざるを得ない状況になったら自然に歩を進めただろうが。

初めの一步を踏み出そうとするその一瞬、「この背後の壁にもたれかかる事が恋しくなるかもな」と早くも後悔の予感が頭をよぎった。

・第二章

まず初めに出会った人間。

それは俺と背格好のよく似た男であった。

その男は最初、特に何をするではなく、道に立っていたように見えた。

しかしよく見てみると男は左右の真白い壁をさすっていた。

そして俺が近づき、男が俺を認めると、男は壁から飛び退いて俺を見た。

その男は体を一切動かす事なく俺を観察した。
よく動く目だ。

俺と彼の違い。彼は服を着ていた。よく西部劇の主人公が羽織っているようなボロいすり切れた布であった。

彼はしばらく俺と一緒に歩いた。

白い道は、いつの間にか人が二人並んで歩ける程に広がっていた。

ともなくすると彼はしきりに私に話しかけてくるようになった。

しかし彼の話す内容は「うんこ」だの「しっこ」だの、表現は違うにせよその域を出ない物であったので、俺は答えなかった。

するとしばらくして彼は俺を攻撃してくるようになった。

口から出る言葉はつたなかったが、攻撃力たるや中々のもので、俺自身の攻撃性を多分に刺激し、俺は反撃した。

俺が攻撃を続けるといつの間にかその男はいなくなり、後にはボロい布だけが残り、俺はその布を羽織った。

男が身につけていた時は相当にボロく見えたその布は俺が着ると多少ましになったように思えた。

・第三章

俺は、更に歩を進めた。

すると、今度は天井に頭が届こうかというぐらい巨大な男が道をふさぐようにして立っていた。

その男を一目見た瞬間、俺は恐怖に震え歩を止めた。

随分と長い時間が流れたような気がする。

ほどなくして、そこを離れる絶好のチャンスが訪れた。

尿意を感じたのだ。

俺はこれ幸いと左の壁に放尿し、それが臭い始めると男に向かって

走り出した。

男の長い腕の下に僅かな隙間が見え、そこをすり抜ける事ができそうだった。

俺が隙間をすり抜けようとしたその瞬間、男はゆっくり口を開き

「がんばれよ」

と言った。

俺にはそれがたまらなく不愉快に聞こえ、更にスピードを上げ後ろを振り向かずに走り抜けた。

男は追ってこなかった。

・第四章

走り終え、息も落ち着くとフツと辺りが暗くなった。

もしくは道と天井が一斉に真っ黒になったのかもしれない。

耳にふつと暖かい息がかかった。誰かが横にいるのだ。数は一人ではない。

ひどく熱いいきれだったが不快ではなくむしろ心地よい。

足元に懐中電灯が落ちていた。

スイッチをつけると光がボウッと伸びた。

辺りを照らしてみると左右には変わらず白い壁があったが、不思議な事にそれは時々透明に透けたりするのだ。

俺はたまらず愉快的気持ちになり、歩いた。

面白い事に俺が左に曲がろうとすると道もまた右に曲がるのだ！

その時間の中で、俺は歩くも走るも自由であり、またこれまでは我慢ならなかった止まって休む事もできるようになった。

心地よさに包まれていると、道の向こうが薄ぼんやりと明るくなってきた。

懐中電灯がいらなくらいに辺りが明るくなつてくると、辺りの人いきれも消えた。

少し上がった体温だけが物悲しく、私は歩きながら、泣いたと思う。

・第五章

涙が枯れ、ようやく辺りがぼやけなくなり、よく見てみると、左右の壁と天井に柄が浮き出ていた。

薄い茶色の、どこの家にもあるような壁の色だった。

随分とつまらなくなった、そう思った瞬間、大きな地震が起きた。ゴゴゴゴと天は鳴り、地は震えた。

俺は恐ろしくなり、これ以上なくらいに体を縮めた。

瞬間、左右の壁は崩れ、だだっ広い空間が目の前に広がった。柄は先程と変わらないが、なにもなく、ただただ広い。

後ろを振り返ると、今まで進んできた白い道が見えたが、それは作り物のように見え、俺から逃げて行った。

俺は座り込んだ。もう休むのはお手の物だった。

ただし安息はなかった。俺が座っていると様々な人間がやってきた。粗暴な男。急に目の前で服を脱ぎだす女（俺はその女に犯されかけた！）。ナイフを握り合い、殺し合う者達。

手を伸ばせば届くような近くにそれらは現れ、様々な事を繰り広げたが、俺は無関心を装い手を伸ばす事はしなかった。

ふと気がつくともたまた背後に壁が出来ていた。それは自らの意志を持ち、ドンドンと俺の背を押した。

目の前にいくつかの道が現れ、俺は真ん中の道に逃げ込んだ。

・第六章

逃げ込んだ道は急な下り坂になっていた。更に床はよく滑る。

バランスを崩した私はもの凄いスピードで坂を滑り落ちて行った。

下り坂のそこから釘が飛び出していた。

釘は幾度も私を傷つけ、私は流血した。

最初に出会った男に攻撃された時以来の痛み、そして初めての流血であった。

意識が朦朧としてくるくらいに長い距離を滑り落ちた。

やがて下り坂が終わり、平たい道に出て、私はようやく止まった。

しばらくはあまりの痛みに動く事ができなかった。真新しい傷からはまだ少し血が滲んでいる。

道を振り返ると、先程まで転げ落ちてきた道に私の血がつき、乾いて黒に近い色になっていた。

下り坂の最後まで歩いて行き、上を見上げると釘と私の血の跡が見える。

道の先を見る。所々釘は飛び出ているが、道は平坦なので避けて進めるだろう。

傷もふさがった。私は歩を進める。

歩きながら、私はなんとも落ち着かない気持ちになった。

感覚を研ぎすますと、道全体が常に震えているのが分かる。

これは予感だ。私は体を強張らせる。

フツと目の前が暗くなる。内臓がせり上がり、息が出来なくなった。「自分は落下しているのだ」とようやく気がつく、思い切り叫んだ。

叫び声を置き去りに、私の体は落ちて行った。

・第七章

ドスンとにぶい音がして、私は止まった。

痛い。釘でできた傷とはまた違う種類の痛みだ。少し動くだけで体が悲鳴をあげる。

目だけで辺りを確認すると、ここはかなり広い道のようなだった。そしてたくさん人間が皆一定の方向に向かって歩いている。ある者は片手にある者は両手にバーベルのような重りを持って歩いている。

バーベルの重さは様々のようで、くるくる回して遊ぶような者もいれば、引きずるようにして運んでいる者もいる。

私の後方から、集団が現れた。

他の者達同様この集団にも様々なバーベルの扱いをする者がいた。バーベルの大きさと重さになんの関係性もない事を知る。

集団の者たちはよくしゃべったが、それは言葉ではなく情報の羅列であり、私を疲れさせた。

集団が通り過ぎる頃、私の手元に一つのバーベルが転がっていた。

そのバーベルは真新しく、重さもそれほど重くない。

私はバーベルを持って歩き始めた。バーベルが真新しい事と、それほど重さを持たない事に私は浮かれていた。

気がつく私の隣に一人の女が歩いていた。先程の集団の一人、だったと思う。

女はバーベルを持たなかった。私はそれをせせら笑った。なんという間の抜けた女。

女が発する意思表示は全て「私の事を愛している」という事に行き着いた。

しかし、私はバーベルばかり見ていた。

そして、突風が吹いた。

・第八章

ものすごい突風だった。

私の体はあっさりと持ち上げられ、何メートルも飛ばされ、地面を転がった。

周りの者達は体を低くし、バーベルをうまく使いながら突風の威力から逃れていた。

私はバーベルを見失っていた。突風は砂埃も運んできた。

ほとんど目も開けられない状況の中、先程の女が飛ばされてくるのが見えた。私は女の手をとり、体を引き寄せた。女の頭を抱え、地面に伏せさせる。

地面を掴む手の爪が剥がれ、血が噴き出した。

飛ばされてたまるか。女の体を引きつける。女は強く私にしがみつ

いた。

私がこの女を守る。もう決めていたのか、今決めたのか分からない
激しい感情が私を包み込んだ。

風がやみ、辺りに静寂が戻った。周りの者達はもう立ち上がり、歩
き始めている。

私の横にバーベルが落ちていた。先程のものより古ぼけ、重みを増
していた。

女の横にもバーベルが落ちている。重さは分からない。人の持つバ
ーベルには触れられない事を知った。

このバーベルはどれくらい重くなるのだろうか。そして、バーベルを
持ちながら私達はどこまで歩くのだろうか。

・現在

私は夜の街を歩いていた。

周りをそれ程高くないビルに囲まれた、駅の一画だった。

ビルのネオンや信号機のライトで辺りは騒がしい明るさだ。

私は右手にスーパーの袋を下げている。中身は歯ブラシや洗剤等の
日用品だ。

私のすぐ後ろを、彼女が歩いていた。彼女は両手に袋を下げ、私よ
り大分遅い歩調で歩いている。

人が五人横並びに歩いててもまだ余裕のある道で、縦に並んで歩いて
理由は何だったろう。

まあいい。どうせ他愛もない事だ。

「持とうか」

「…どっち」

「両方。貸して」

彼女から二つの袋を受け取り、左手で三つの袋を持った。ズシリと重い。

空いた右手で、彼女の頭を撫でる。

ほどなくして、彼女は泣き始めた。たまによく分からない声を出しては、泣いた。

これで安心だ。彼女は今、悲しみを溶かしている。

彼女の頭を撫でながら、周りの光を見る。

騒がしい光も、見方によっては綺麗に輝く事を教えてくれたのは彼女だった。

これから彼女と暮らし、年老いて行く。

その前にしておかなければならない事がある。

これまでの人生を書き留めておく事。

それを、今夜始めよう。

・エピソード

私は机の上に新品のノートを広げた。

少し風が吹いている、木々の揺れる音だけがする夜だ。

スタンドの明かりをつけ、ペンを手に取って書き始める。

「目の前には、白い細い道が続いている」

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9201o/>

習作

2010年11月15日00時57分発行